

## 『下田歌子私文』

— 下田歌子関係資料紹介 —

大 井 三 代 子

本文

自筆草稿

墨書 四十二行

縦三一・八糎 横一一三・五糎

畳紙

墨書で「下田歌子私文」とあり

表題の右横に墨書で「(一八五四—一九三六) 女子教

育家。実践女学校創設者。」と注あり

縦三三・四糎 横四一・七糎

元は袋、開いて二つ折りしたもの

『下田歌子私文』とは下田歌子の自筆草稿で、山縣有朋の次女松子の七歳の祝いに招かれた時のことを書いたものである。松子は明治十一年(一八七八)八月に出生しており、この草稿は明治十七年(一八八四)十一月十五日頃に書かれたものである。歌子の随筆は『香雪叢書』第一巻に収載されているが、この一文に該当するものはなく、下田歌子と山縣有朋の妻友子との関係の示す貴重な新出資料である。

表題『下田歌子私文』は、畳紙に所蔵者が記したと思われる題を用いたものである。次にこの草稿の書誌と翻刻を記しておく。

【書誌】

【翻刻】

十一月なかの十日餘り五日と

いふに山縣君の別墅にまね

かせ給へりこは姫君の七つのほき

ことせさせ給はんのみこゝろなら

めとおのつからこと廣こりてことく

しからずも哉とおほしの給はせたる

北のかたのみこゝろ掟にしたかひて

たゝさる紅葉のかけにわか教子

たちいさなひつれて言のはのちりをも

かき集めんといひつたへてまうて

なんとす初には何事も覚えすとも明

ねかしといひ願ひて待つけたる空の

あやにくにかき曇りたるに雨ふらは延

へんとすといへはなきぬ斗打なひくも

をかし斯て昼つかたより立まよひし空

名残なう晴て小春の空のけしき

うらくとのとかなるに車廿餘斗

引つゝけて何に道のほとこ、彼處

の籬の菊のうつろひたるもめてたきに

またはちりめきてこと更に事そき

給へるもめつらかにめてたし泉水築山

のくまゝに紅葉のうつろひわたりて

心地よけなる鳥の聲も折にあひ

たるかし北のかたかしるへし給へる

まゝにいとゆほいかなる御園のうち

かなたこなた行めぐりて見るもの

聞ものにつけていひ出せるつたなき

たくみなるをいはず一つらにかいつけ

させんとするにむけにいとときなきも

ましりてなにはつもとくしう

あたら時をうつさんことのをしさに

いひ出せるまゝをよくも取なほさす

ましてこれのはし書の何事ともわかれ

ぬまていとくうかひなてなるもとかう

いひ思ふへきいと間もはへらねはたゝ

其事さまのたかはぬまてを

かことに斯は

ものし

はへり

たる

なり

歌子

山縣有朋は慶応三年（一八六七）七月石川良平の長女友

子と結婚した。石川良平は山口県湯玉の庄屋を務めた富豪である。有朋は友子との間に七人の子を儲けるが、次女の松子を除いて夭逝している。系図を参照すると、有朋は跡継ぎがなく、姉の壽子と勝津兼亮の次男伊三郎を養子として迎えている。本文の「北の方」とは、有朋の妻友子、松子の母のことである。

山縣有朋の趣味の一つに造園がある。椿山荘（明治十一年）、大磯の小洵庵（明治二十年）、京都の無鄰菴（明治二十四年）などが有名で、それらは別邸として使用された。本邸は麴町五番町にあり、「別墅」とは椿山荘のことである。

下田歌子と山縣友子との交流は、桃天学校開校の頃から始まったと考える。桃天学校は、明治十五年（一八八二年）三月、伊藤博文、山縣有朋、佐々木高行らの勧めにより麴町区一番地に下田歌子が開設したものである。当初は下田学校と称したが、三か月後の六月に桃天学校と改称した。政府高官の間に新時代にふさわしい女子の教育を望む声があり、彼らは自分たちの子女の教育を歌子に委ねたいと考えた。歌子は病夫の看護や家庭の経済的な問題を抱えており、彼らの勧めを受けて教育者としての第一歩を踏み出した。

実践女子大学・短期大学図書館所蔵下田歌子関係資料の中に『桃天学校地区別生徒名簿』の「麴町区」の中に「山

縣友」の名が記されている。『下田歌子先生傳』の本野久子の回想によると、桃天学校にいつも見えるのは伊藤侯爵夫人、山縣侯爵夫人、田中子爵大臣の夫人たちで、若い女性には少なかったと述べている。田中子爵大臣とは田中光顕のことで『桃天学校地区別生徒名簿』に妻伊與子と長女圭の名が記されている。

また『桃天学校出席表』（明治十八年八月十一日より同二十九日）を見ると、『桃天学校地区別生徒名簿』に記されている生徒数より増えて、本科、予科、別科と分けて編成している。本科に在籍する生徒の出席者数は最大で三十人、華族女学校が開校されると編入試験を受けて入学した黒川千春子等の名前があるので、少女たちで編成されていたと考える。祝いの会が開かれた明治十七年は同様の状況であったと思われ、「車廿餘斗引つ、けて」連れて行った教え子たちは桃天学校の本科生たちであろう。

下田歌子関係資料の中には、宛先に「山縣御奥様」「山縣北のかた」などと記した下田歌子の書簡四十五通が所蔵されている。書簡の言葉には親しみがあり、三女信子の誕生の時に歌子が命名の文字を選んだことなどが記され、山縣家と歌子の交流の深さを見ることができる。『下田歌子私文』は具体的な交流の一端を示すものである。

友子は体が弱かったようで、これらの書簡の多くに彼女

の病状を氣遣う言葉が書かれている。友子は明治二十六年（一八九三）九月に肺病で死去、四十二歳であった。有朋は友子の没後に貞子を後妻としたが、入籍しなかったために系図にその名が記されていない。

『女子学習院五十年史』に掲載されている「入学・卒業生名」の中に山縣松子の名が見られないので、松子は華族女学校に入学していない。下田歌子関係資料の桃天学校に関する記録の中にも松子の名を認められない。『明治大臣の夫人』によれば、友子は和歌、生花、音曲、裁縫などに長じていて、家庭教育の中に侯爵家の子女として相当の学芸を教えたところ。松子が家庭以外に教育を受けた記録はなく不明である。

松子は船越衛の長男光之丞と結婚、昭和十九年（一九三六）十二月に逝去した。明治二十九年（一八九六）十一月に長男光輔を出生しているが、結婚した年は不明である。彼女は光輔、洋平、有光と三人の子どもを儲けたが、次男の洋平は夭逝している。三男の有光は山縣有朋の養孫となり、山縣男爵の祖となった。

『下田歌子私文』と題する自筆草稿は岡崎久司氏の所蔵であるが、翻刻し紹介することのお許しをいただいた。太平洋戦争で多くの資料を焼失した実践女子大学にとっては新たな資料を得ることができた。岡崎氏の御好意に深く感

謝いたします。

## 参考文献

佐瀬得三著『續當世活人畫 一名・名士と閨秀』 春陽堂 明治三十二年

岩崎勝三郎著『明治大臣の夫人』 大学館 明治三十六年（近代デジタルライブラリー）

徳富猪一郎編述『侯爵山縣有朋傳』 山縣有朋公記念事業会 昭和八年（近代デジタルライブラリー）

藤村道生著『山県有朋』 吉川弘文館 昭和六十一年

新装版（人物叢書）

女子学習院編『女子学習院五十年史』 女子学習院 昭和十年

故下田歌子先生傳記編纂所編『下田歌子先生傳』 故下田歌子先生傳記編纂所 昭和十八年

（おおい みよこ・実践女子大学非常勤講師）

